

## 日本の民泊～おもてなし～

東京、浅草の観光名所浅草寺のほど近く。薄暗い路地へ入ると古い空家のような建物とモダンな基調の建物が並んでいる。一軒家の扉を開けるとオーストラリア人のゲストがお出迎え。モダンなリビングにはダイニングテーブルとこたつがありキッチンも完備されている。シンプルでありながら誰かの家を訪れている感覚。ここは建設資材商社で働きながら、Airbnb（エアビーアンドビー）を利用して外国人観光客を中心に宿を提供する、Yoshiさん（33）の持ち家だ。

Airbnbは世界190カ国、約34000以上の都市で人々をつなぎ旅行者などに宿を提供し、また宿泊の予約ができるサービス。その中でもゲストのレビューが常に5つ星以上のホストをスーパーホストと呼び、稀有なおもてなしが受けられるのも魅力の1つである。Yoshiさんの宿に泊まった外国人のレビューを見てみるとどれも5つ星。「最高のホスト」「また泊まりたい」などの言葉が並ぶ。

Yoshiさんが同サービスを始めたのは1年前。ドヤ街の簡易宿泊所でアルバイトをしていた経験から興味を持ったのがきっかけだそう。現在の宿は妻の両親から譲り受けた、築70年の物件を半年以上かけて改修した。泊まりに来るゲストは国籍も人数体系も様々。中には「この家売ってくれ」と言ってくる投資家もいる。そんな多様なゲストに対してもYoshiさんはゲストの母語に合わせて、ウェルカムメッセージを欠かさずに書いたり日本のお菓子を用意したりしている。

オーストラリアから4日間日本に滞在中の一家は、来日ぎりぎりまで銀座のホテルも予約していた。ホテルではなく民泊を選んだ理由はホテルだと一家5人、別々の部屋に泊まる必要が出てくる。民泊の特徴として柔軟性があるために融通が利くということがある。

「彼は今までに出会ったホストの中で一番よ」

部屋の質以上に、Yoshiさんがお寿司やトンカツなど日本を感じさせる手料理を振る舞うなど積極的にコミュニケーションを取ってくれることがそう感じさせる理由だ。その国々の本当の顔を見て感じ、その場所で現地の人々との交流が可能な民泊を彼らはこれからも利用していくという。

現在、民泊は旅館業法によって取り締まられており、自治体の許可がなく営業をすれば法律違反となってしまう。そのことはYoshiさんも自覚している。しかし近年の外国人観光客の増加や2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、宿泊施設が減少している状況を受け、規制緩和の動きも見られる。日本独自の民家で長期滞在や自炊など様々なニーズに応えられる民泊。そこにホストのおもてなしが揃えば何よりも魅力的な宿になる。

「おもてなしをしている感覚はないですけどね」そう謙虚に話す姿勢に彼の人柄があふれていた。

ライター：荒牧萌子、横澤樹  
エディター：横澤樹

## 編集後記

今回は、外国人の民泊ということで、最近話題のAirbnbについて書かせていただきました。私自身、海外に旅行に行きたいという気持ちがあり、その際には試してみたいという思いがありました。実際に身近な先輩や友人も利用しております。記事を書くにあたって、受け入れる側のホストのお話と、体験する側のゲストのお話両方をお聞きする事ができたのでより一層民泊の良さを知る事ができたと思います。（荒巻 萌子）

今回民泊というサービスに注目して記事を書いたが、取材を通して思ったよりもゲストへのサービスが充実しており、ゲストの満足度がすごく高かったように感じた。しかし、現状では民泊が法律によって取り締まりを受けているのは事実である。2020年に向けてこの歪んだ状況がどう改善されていくのか、これからも民泊サービスに注目していきたい。（横澤 樹）